



## アイスのおともにクラシックをどうぞ♪

## 『シューマンの指』 奥泉 光

音のない演奏に魅せられて (スタッフ・M)

## 音楽を読む

この本は、天才ピアニスト・永嶺修人との交流を主人公の目線で描いています。修人の演奏の中でも、特に印象深いのはシューマンの「幻想曲八長調」Op.17です。この曲は、主人公が夜の学校で、偶然に修人のピアノ演奏を聴く場面に使われており、彼の演奏を聴いた主人公の心には、美しい情景が広がります。私はその情景を通して、音のない音楽を体験しました。

心に美しい情景をイメージさせる音楽に興味を惹かれて、同じタイトルの曲を聴きました。軽快なピアノの音も綺麗ですが、音の間にある余韻によって、情景に神秘さを感じることが出来ます。もう一度読んでまた違う発見があるのではないかと期待して、ふたたび本を開く私もまた、修人の演奏に魅せられた一人なのかもしれません。



『シューマンの指』 奥泉 光

出版社：講談社  
請求記号：B913.6/4  
駅南図書館所蔵ありナクソスに  
ログインして  
アクセス！

「幻想曲八長調 Op.17」で検索すると、233件がヒットします。コラムにもあるように「音の余韻」に着目して聴いてみると、また違った面白さがあるかもしれません。自分なりのクラシックの聴き方を探してみるのも楽しいかもしれませんね。



## クラシックにふれよう

## ヴォルフガング・アマデオ(アマデウス)・モーツァルト

神に才能を愛された男 モーツァルト (スタッフ・S)

「音楽史最大の天才」(\*1)と称されたヴォルフガング・アマデオ・モーツァルト(\*2)は、1756年1月27日、神聖ローマ帝国領ザルツブルグに生まれました。

幼少期から「目隠しをしてピアノを弾いた」「一度耳にした曲を楽譜に描いた」などの天才的なエピソードは事欠きません。ただある種天才的な人物のエピソードとしては平凡と言っているのかもしれませんが(\*1)。

作曲家でヴァイオリニストだった父レオポルトは、幼い息子の才能に気づき、この才能を伸ばすことこそが自分の使命であると固く信じた、いわゆる「教育パパ」でした。6歳から23歳までの18年間、父と共にヨーロッパ中を旅しましたが、この経験が彼の幅広い作曲活動に活かしたことは間違いありません(\*3)。

音楽では天才だった彼も、自分の雇い主であったザルツブルグ大司教と対立するなど世渡りは下手だったようです。

誰もが一度は耳にしたことがあるモーツァルトの曲。軽快で、屈託のない、それでいて繊細な曲は、昨今のコロナ禍での閉塞感を吹き飛ばしてくれるように思います。是非一度聞いてみてはいかがでしょうか。



参考 \*1『モーツァルト よみがえる天才3』岡田暁生(ちくまプリマー新書 2020年)

\*2『モーツァルトは「アマデウス」ではない』石井宏(集英社新書 2020年)

\*3『クラシック名曲全史』松田亜有子(ダイヤモンド社 2019年)

ナクソスにログインして  
アクセス！

モーツァルトの楽曲の収録数は膨大！とにかく何でもいいから聴いてみたい！という方は、作曲家検索をしてアルバムリストをクリックすると、そこからよく聴かれている人気アルバムが確認できますよ♪

## 編集担当のひとこと

夏の日差しに焦がされながら出勤する朝でも、弦楽器の澄んだ音色を聴くだけで、耐え難い暑さがやわらぐような気がします。最近のお気に入りの一曲は、ヘンデルの「水上の音楽」。貴族になったつもりで聴けば、通勤電車もテムズ川に浮かぶ舟に早変わり!? ナクソスにも収録されているので、ぜひ聴いてみてくださいね。(N)

## 司書の道はバレエに通ず (スタッフ・I)

## 音楽とわたし

バレエ『 Coppélia 』は私にとって、多様な読書をするきっかけになった作品です。

数十年前、私は第三幕を踊ることになりました。主人公達が結ばれ、登場人物達が農村の生活を表わした踊りで祝福する場面です。しかし、先生は楽しく踊るだけを良しとせず、音楽を止めては物語や役柄の背景を細かく聞き、答えられないと「教養をもちなさい」と一喝しました。

私はバレエを通して意図せず歴史や哲学など幅広い分野の本を読むようになりました。ダンサーにはなれませんでした。多角的な視点を持てたことは司書として大きな財産となりました。『Coppélia』は予想外の連続で物語が進みます。三幕冒頭の『鐘の行進曲』を聞くと、改めて人生は思いがけなく面白いものだと思わせてくれます。

